

菅原傳授手習鑑 松王屋敷(書き物).....二百二十頁

《以上百段》

淨曲 百段 語り物の譯惣目録(終)

序

.....文やら、小言やら、述懐やら、理風やら、高慢やら.....

此の「序文やら、小言やら、述懐やら」は、師匠名門二が昨年(三十八年)の夏、吾等門第五六輩の爲に、毎夜の様に、ビール片手に涼み臺にて、説話せられし雑談を始め其の後、話もせられ、聞きもせし雑談の吾等初心の者には、心得になるべき事、面白き事も少なからず、と思へば。如是我聞と題し、各自勝手に筆記しぬ。それを今度取り纏め「語り物の譯」の巻首に添へんとす、素より稿を立て、筆を執りしものなられば、文に連續を欠き、文章も一定せず。且つ主義の一貫せざる處もあれども、これ、自然の事とて止むを得ず。依つて此の舛稿を師に示して添削を乞ひしかど、たゞ「よいやうに」とばかりにて、敢て朱黄を加へられずさればとて、この儘やまんも残り惜し、と思ふもの故、舛稿の儘これを印刷に附する事とはなれり。文責素より吾等にあり。不文を告めて、名門二師匠を煩し給ふなど云ふ。 竹本其太夫等敬白

此の語り物の譯を「さらかね本」の巻首に加へやうとしたは僕が創意で。從來こんな風に淨瑠璃を解釋したものは見ぬ。これは、今日以後の人々は兎もあれ、今日までの語人と云へば、嘉永、安政時代の茶瓶連で、普通教育も受けて居無い人々が多い。斯う申しては甚失禮ではあるが、マア文盲な人々だから、全部の筋や人形の性格なんどに就いては、露程も研究をして居ない、稽古と云へば、師匠からの口移しで、ソレで其の師匠からして、アヤシイのだからたまらない。

僕は子供の時(十四五才の頃)就いて居た師匠から(この師匠は藝もよかつたが、其の頃手紙の一本も書ける程の學者であつた。但し思ふ言も有るので態と名を書く)産字引字の印可を受けた、其の免許料は金貳分(今の五十錢)であつた。其の印可狀と云ふは、小奉書二ツ折の紙へ。表にアイウエオの五十音を書き、夫れに木火土金水の五字と、開合の二字を配當し、裏には産字引字の例を、五ツ六ツ載せ、其の中にも「笑ひ」に就いて「アハハ、、ハア」(開(喉)「ムフ、、フ」(合(唇)等)が書いて有つて、ソレで他言不許と云つた様な、厳しい掟書があつた。(此の免許狀紛失して今は無し)この當時、許可狀に對して、一通り師匠の説明も有つたが、僕に聞く耳が無かつたか、師匠の説明が不充分で有つたか、其の時は不得要領で畢つた。其の後二三年も過ぎて、文部省より小學入門と云ふ、小兒用の教科書が発行せられた、此の小學入門を見ると、貳分出して、しかも敬々敷印可を得た、五十音の圖は、卷の初に麗々敷出して有つた。これに依つて思ふに、義太夫に於ける口傳面授と云ふものは、秘事は睫毛で、多くは斯んな事であらう。(また外にも傳授事は澤山あるが)ソ

コでこの師匠はこんな事でも、傳授仕様とする師匠だから、其の頃の淨瑠璃連の中では、マア學者であつたか。それで先きから傳授しやうとする事の外は、なにを聞いても薩張り知らぬ。イヤ千に一ツや、萬に一ツは知つて居る事が有つても、夫れは皆悉く神秘視して、屁の様な事でも人に教ふる事を惜む。唯さへ無學な弟子を、こんな調子で教へぬから、尙もつて文盲にして仕舞ふ。但しこれは僕が學者と認むる師匠の事で、其の他のかいなでの師匠連中に至つては手紙が書けぬ位でない、五行本さへ假名がなければ讀み得ぬ程の實に無學文盲な者ばかりで、何んぞ分らぬ事が有つて、師匠に質問すると、其の答辨は斯うだ「ソんな事を今から聞いても仕方が無い、語り物の二三十段も出来れば自然に分る事だから、マア精出して勉強したまへ」くらゐなもので。それを尙、手厳しく質問すると、不得要領な答辨を、左も勿體らしくする。其の答辨が道理にも、時代にも、曲節にも錯誤して居て、諸ひ難しと思ふ点もあるものから、尙押返し、其の錯誤々謬と思ふ点を指示して再問すると、師匠はムツとした顔で

「私は夫れ以上は知りませぬ、違つて居ましても私は師匠から其の通り聞いて居ます。其の上の事が御調べになりたくば、外の學問の有る師匠に就いて聞きなさい。ナァーニ馬鹿な、理屈で義太夫は語れませんよ。ハイ左様なら」と云つた様な風で。斯う云ふ事を質問をする人を仙人と符合して擯斥して取り合ぬ。之れ「知らしむ可からず依らしむ可し」と云ふ政略でもなんでも無い、自體師匠からして、一通りの事を知らぬのだから仕方が無い。

斯んな風に、文盲な師匠か文盲な弟子を仕立てるから、甚敷に至つては、光秀が女だか、時姫が男だかさへ知らずに、親不孝な聲を出して唸つて居る。唸るもよろしい、獨よがりの人困らせで無くは、敢て咎むる處は無いが、こんな太夫さんと來たら、時も所も辨へず、メツタ矢鱈に唸りつける。其の功能は不思議に利いて、味噌が酢ッばく成るのみならず、子供は泣き出す、病人は弱る。實に御長屋様の御迷惑は、御察し申すに余りありだ。

義太夫と云ふものは、人を困らせたり、れ長屋様に御迷惑をかける物では無い、自も娯み、人をも樂ましむるのか本意で……ソレが、斯く反對の結果を來すのは、藝の未熟なるは勿論だが、狂言の筋を知らぬからでもある。音曲の事、技藝上の事はよき師に就いて練磨するは勿論だが、狂言の筋を會得して腹が出來て居れば藝は下手でも「下手淨瑠璃鳴戸で人を笑はせる」と、云つた様なカスは喰はぬものである。

義太夫は、今様の朗詠や、長唄を唄ふとは違ひ、其の人物の性情、即、老幼男女、喜怒哀樂、善惡邪正を語り分る物なれば、自他の區別も、地、臺辭の境界も無く、ノッペラ捧の根深節では、聲かよくても、節廻しがうまくても、面白く無いは無論の論だ、まして況んや、先天的の惡聲に於て乎だ。

「理屈で義太夫は語れぬ」と、云つたは千古の格言で、動かす事は出來ないが。サテ理屈なしの義太夫も、亦聞くに足らぬものである。

「謠秘傳書」に「聲を忘れて曲を知れ」と云ふ事か書いてあるか。僕は百尺竿頭、今一步

「私は夫れ以上は知りませぬ、違つて居ましても私は師匠から其の通り聞いて居ます。其の上の事が御調べになりたくば、外の學問の有る師匠に就いて聞きなさい。ナア一ニ馬鹿な、理屈で義太夫は語れませんよ。ハイ左様なら」と云つた様な風で。斯う云ふ事を質問をする人を仙人と符合して擯斥して取り合ぬ。之れ「知らしむ可からず依らしむ可し」と云ふ政略でもなんでも無い、自體師匠からして、一通りの事を知らぬのだから仕方が無い。

斯んな風に、文盲な師匠か文盲な弟子を仕立てるから、甚敷に至つては、光秀が女だか、時姫が男だかさへ知らずに、親不孝な聲を出して唸つて居る。唸るもよろしい、獨よがりの人困らせで無くは、敢て咎むる處は無いが、こんな太夫さんと來たら、時も所も辨へず、メツタ矢鱈に唸りつける。其の功能は不思議に利いて、味噌が酢ッぱく成るのみならず、子供は泣き出す、病人は弱る。實に御長屋様の御迷惑は、御察し申すに余りありだ。

義太夫と云ふものは、人を困らせたり、れ長屋様に御迷惑をかける物では無い、自も娛み、人をも樂ましむるのか本意で……ソレが、斯く反對の結果を來すのは、藝の不熟なるは勿論だが、狂言の筋を知らぬからでもある。音曲の事、技藝上の事はよき師に就いて練磨するは勿論だが、狂言の筋を會得して腹が出来て居れば藝は下手でも「下手淨瑠璃鳴戸で人を笑はせる」と、云つた様なカスは喰はぬものである。

義太夫は、今様の朗詠や、長唄を唄ふとは違ひ、其の人物の性情、即、老幼男女、喜怒哀樂、善惡邪正を語り分る物なれば、自他の區別も、地、臺辭の境界も無く、ノッペラ捧の根深節では、聲かよくても、節廻しがうまくても、面白く無いは無論の論だ、まして況んや、先天的の惡聲に於て乎だ。

「理屈で義太夫は語れぬ」と、云つたは千古の格言で、動かす事は出来ないが。サテ理屈なしの義太夫も、亦聞くに足らぬものである。

「謠秘傳書」に「聲を忘れて曲を知れ」と云ふ事か書いてあるか。僕は百尺竿頭、今一步

を進めて「聲を忘れ、曲を忘れて筋を知れ」と云はんとす、蓋しこれは余り極端な言かも知れぬ。

從來の義太夫の教育法は、曲育ばかりで學育かない、妙な熟字だから、光秀が惡人だか善人だか、時姫が、淫婦だか貞女だか知らずに居る。ソレを知らずに語るのだから腹か出來ぬ、腹の無い義太夫は、聲がよくても節廻しが上手でも、長唄と一般、面白味の無い云ふに及ばぬ。これは教育法が曲育ばかりに傾いた結果だ。と云つて、團十郎の活歴(劇)風にカブレ三浦之助を木村長門守、北條時政を徳川家康、大星由良之助を大石内藏なんぞと、狂言を事實に當て嵌んとした、ハイカラ的の改良騒ぎは、素より執るに足らぬ愚見で、事實は事實、狂言は狂言と両様に筋を呑み込んで居らねばならぬ。

嘉永安政時代は、小學制度の行はれぬ時代だから、こんな時代に學育を奨励しやうとしても出來ぬ話で、ソレで盲目連には盲目連相應の、曲育だけを奨励したものと見ゆ

る、實に之れは止むを得ざるに出たのであらう。

イヤ其の時代は其の時代で、曲育の外にドエライ學育が有つた、ソレは「訛り」を正すと云ふ事で、此の「訛り」と云ふ事、古來同人間にはヤカマシき事なれども、而も義太夫の事を書きし書物には、これを論せし物これまで一ツも見當らぬ、却て、觀世謠指南録に「一ツ節なまりは古來より謠ひ候。詞なまりは嫌なり。白言は大事に候。筆頭難述口傳」とあり(僕は、現今の宗家清原氏に面識あり、不違師に逢うて彼の家の訛りに就いての説を確めてお話する事にする)實に口傳ならざれば解し難き程の事なれば。茲に述る僕の説は、一も根據の有るものでないので、其の説の杜撰なるは云ふ迄もない事と、斯う斷つて置いて。サテ訛りも、悉しく云へば「手爾波訛り」と「品訛り」と「音訛り」の三ツになる。この三ツの外にまだ「糸訛り」と云ふ事もあれど、これは後に云ふ。先づ手爾波訛りの事に就いては、はなけぬき(文政頃の出版物)に「假名づかひを悉しく會得すれば、知行にも成程の事なれば、知らぬもことわり」云々と書きし如く、文盲な時代に、こんな事云ひ出

したからとて、迎も及ぶべき事でないので、コレは先ッ手をつけぬ事にしてあつた。されは其の結果は、今、日本の第一と云ふ、攝津大塚や大隅太夫でさへ折々「かゝり結び」や「てにをは」を誤まつて、新聞でたゝかれる。近い話は、僕は本年二月(八日)大阪の堀江座で新報の芝六忠義の段(妹青山の通し)を聞いた。新報はよく語ります。僕は、大隅よりはよいと思ふ、糸の團丸もよく弾きました。がソレは藝評。こゝで云ふのは、此の大隅にも勝ると思ふ新報が「出御さうとへいひつ」と、云ふ。へいひつはけいひつ(警蹕)の誤りのハテ妙な言を云ふと、思ふと次の角太夫の花渡し段にも、同じくへいひつと云ふ、警蹕をへいヒツと云ふは、堀江座一流の新名詞か、その他帝都をていどと永くひき、密通をみつと詰めて云ふ、これは産字でも香字でもない、全くの誤りで帝都とも密通とも、語つて語れぬ事ではない、それをこんな片言を大阪の真中で語つて居るとはア、情ない、と云はねばならぬ。(この外にも澤山有るがやめて置く)これは問題外だか、ついでだから云つて置くが、山の段で久我之助を遣つた、吉田玉

市と云ふ男は、年も若いで仕方は無いが、薄化粧イヤ襟足なんどは白々と白いものを塗つて居て、ソレで見物に秋波を呉れる、その嫌味さ加減と云つたら反吐か出さうで堪らない、顔に白い物を塗つて、嫌味がしたくは、役者になつて「れ入りなされませう」にでもなればよいに。

も一ツついでに云つて置くが、この山の段の水音と云つたらない、序破急の撥音整然として、敵軍を追ひ拂ひし酒井の濱松でもなければ、由良之助の打ちしと云ふ、山鹿流では素よりなく、時の太鼓や、法華宗の團扇太鼓の音とも違ひ。變な音がドンノ、ト。同じ太鼓でも、水音、風音、雪風なんど、ソレ／＼に區別の有るもので「ナニ淨瑠璃は歌舞伎と違ふから、鳴物なんどはどうでもよい」と、コレ／＼夫れや何を云うて居るのだ。淨瑠璃なればとて、時の鐘、時の太鼓は入れるでないか、鳴八の鉦、毛谷村の鶯笛、近くは芝六の萬歳にも本鼓を入れて居る。鳴物に用がなくばそれまで、入れる限りは音を以て其の物を代表せねはなるまいがな。その入れた鳴物が、そ

の物を代表せず、吉野川の水音が、夜廻りの太鼓の音に似て居るとは、イヤハヤ呆れて言か云はれぬと、云つて、これは堀江座ばかり下方が悪いのではない。先年文樂で、大隅の長局を聞いた時、奥庭の立廻りが八千代獅子の相方で、その八千代獅子の相方のまづさど云つたら、言語道斷輕燒同前の始末であつた。

堀江座は舞台は闇ひが道具はよい、斯程までに道具に注意するとなら、光線と云ふ事も、鳴物と云ふ事も、今一層注意したらよからうに、併し、これは問題外の話なれば閑話休題として、さて本文の假名遣に就いて云はし。

此の『かゝり結び』や『手爾於波』の事は、一寸六かしくて、茲で云へば永くなるから略して置くが。もし研究して見やうとなれば、獨學なれば手近い本では本居先生の『ひもかゞみ』また當時は『言海』『言葉の泉』なんど、云ふ調法な本が澤山あるから、學問上で研究をして見やうと云ふ人は、それを見るがよいのである。また『浪花名物淨瑠璃雜誌』の十五號及、廿五廿六號にも、深切に書いて有るから、一見するがよいと思ふ。

品訛り、これは、かの『浪花の音も伊勢の濱萩』で、所々で名稱の異なるのを云つたもので物其の物が變るのではない。譬へは大阪で度量を『チキリ』と云ふ、度量をチキリと云ふは、所謂大阪詞で、普通は是れをハカリと云ふ。すしの事を大阪(京都)ではねすもじと云ふ。度量の事をハカリと云ひ。すしの事をすしと云へば、田舎訛りと云うて笑ふ。ダガ、三代記の時姫が『どちらが重い軽いやら』と云ふ時の意志は、忠と孝との輕重をはかり煩ふと云ふ意で、若し物其の物の輕重を量らんとなれば、度量を以つて試むるより外、策は無い。されは、度量は度量で有るが當然で、これが田舎詞でも田舎訛りでもないのである。もしこれを大阪詞で、其の『輕重をチキリで見る』と云つたらそんなものか。まだ可笑はすしをすしと云へば、田舎詞と笑へども、大阪の太夫方でも『千本櫻れすもじやの段』とはよも云ふまい。また大阪では茶の事をねふうと云ふ、茶がねふうなら、茶を賣る店は、ねふう屋か。されは『忠臣藏七段目ねふう屋の場』と云はねはなるまい。併しコイツは少し横理屈か。斯んな事云ひ出すと留め度が無いか

ら、マアよすとしやう。要するに品詠りと云ふ事は、取るに足らぬ事と心得て居ればよいのである。

音詠り、之れはまた非常に重き事になつて居る。それで之れが、上平去入の四聲にても關係して居る事かと云へば、そうでもない。さしても無きこんな事を、殊に重大なる事に取なすは、聊か譯の有る事で、其の表面に顯れし理由としては、彼の鼻毛萩に云ふ「義太夫節は浪花を元とし、五畿内を善とす、其の故は、他國にても上手に語る人も有るべけれども義太夫の音備らず、譬へば東武の板子節、伊勢の河崎音頭、其の外國々在々の田植歌まで、浪華の人よく諷真似すれども、節は真似れども音は似せる事あたはずこれ其の國々に備りたる音あるが故なり」と、また東廬子にも「音は畿内は大體平聲にて、西國は去聲、東國は上聲なり、音に甲乙はあれども、言語に夷俗の差別なし、全く音は水土により、言語に習俗の癖あり」と云へば、鼻毛萩の説も一應は尤に似たりだ。

竹本義太夫は大阪天王寺村出生の人なれば純粹な大阪者で、大阪辨で有つたは言ふを俟たぬ。其の義太夫が、語り廣めた義太夫節を語るのだから、大阪辨でなければならぬ、と云ふは、至極道理の有る事である。されど、此の義太夫と云ふものの、目的が、大阪の土音を聞かする、語を代へて言は、「大阪語」の修練の爲に語ると云ふに有るのなら、議論も小言も無いのだから、淨瑠璃道の枝析の(明和八年の出版、麦里軒四考の序)「ソレ淨瑠璃は人の心を種として万の趣向とはなれり」と、また麴亭主人の義太夫會の緒言に「就中義太夫節は叙事的叙情的音曲なるを以て」云々と云ふ如く、將して義太夫節は人情の極微を穿ち、人に感興を與ふると云ふが目的となれば、大阪辨ならざれば義太夫は語れぬ、と云ふ筈は無からう。詞に多少の詠りが有つても、聽人が聽いてハ、アと合点し、ナァル程と感心せば、能事畢ると言ふものだ、詞ばかりが大阪でも、筋も知らず、節は拙く、聲の悪い太夫がウン／＼と唸り散して、人に迷惑を懸るが、ソレが義太夫の眞面目ではなからう、と言へば「薩摩のシャ／＼でも、奥州ズウ／＼でも

義太夫語るに差支へは無いか」どの反問が有るであらう、が。僕は此の答に躊躇はせぬ『百人が聞いて面白いと云ひ、千人が聞いて感心する程なれば、敢て詞尻の土音ぐらゐの微瑕は咎むるに及ばぬ』と、云はん。譬へば『今死ヌる身』のヌを子と誤りて『今死ぬる身』と自他の差別をメチャクにする、文盲な太夫の手爾波訛りより、まだ「か」が「が」。「て」が「で」でも、意味にさへ異同を生せねば音訛りの方が、罪が軽いと云ふものだ。

昔は封建時代とて、交通の便利が頗る悪い、交通の便利が悪ひから順つて國々の、人情風俗にも大きな違ひが有るが、今日の如く交通の便利なる世の中には、人情風俗も幾分か融和して、口さへ利かねば、名古屋を初め、三都の人達の風俗も、或る特殊な点を除きては、一見して見分け難きまでになつて居る。併し發音は土地の自然に依つて生じ、交通が便利になりしとて、風俗が似たればとて、ソレで土音が變ずると云ふにはあらねども。蓋し電話の架設なりし以來は、一種の「電話辞」と云ふものが出来

其の辞が自然に普通語に轉し、今日、京大阪の人で、旅行の一ツもした者の詞は、大阪者でも京都者でも、純粹な上方詞でも、發音でもない様になつて居る。其の証據は、元龜天正以前の大坂辨は、豊臣氏の築城後、尾張辨と混和して、大坂辨と尾張辨と五分々々のものが出来た、ソレが今の大坂辨で。また武藏の昔の詞は、徳川氏入府以來三河辨と混じ合つて、維新以前の大坂辨が出来、維新以來は薩摩ッポの勢力の強いので、或る点には多少九州辨が今の東京辨に混じ、また維新以前でも、人の掃き溜と云つた江戸。今日では交通機關の完備せしと共に、諸國の入込み人の多き爲「京に田舎あり、江戸に江戸ッ子無し」で、純粹な江戸ッ子辨の者は、殆んど稀など云ふ程で。江戸辨が、諸國辨に化せられつゝ有るは、事實だから仕方が無い、茲五六十年来経たら、江戸辨と云ふものが無くなつて、江戸辨を臺に、諸國の詞を混和せし東京辨と云ふものが出来て、江戸ッ子の江戸辨と云ふものは、三馬や一九の洒落本に跡を残すのみで。今の若者等が、吉原のありんす辞をアメリカ辞かなんどの様に思ふと同じで、

後々の人々は、一九や三馬の洒落本を讀んで「昔は斯んな辭を使つたものか知ら」と、不審を打つ程になるかも知れぬ。

されば今日の大坂詞も、發音も、義太夫時代の發音や詞其の儘であらうか。恐らくは多少の變化は有つたであらう。大體の發音は、土地に依つて動かぬものとする。時代々々で詞は勿論發音にも多少の異動の有るは數の免ぬ處で有る。が、たとへ發音や辭に幾變化が有らうとも、義太夫は現今の大坂辨でなければ語れぬ、と云へば、茲に可笑話が有る。

東京者は元來「ひ」を「し」としかよう云はぬ。コレは云ふまでもない江戸訛りで、心有る者の耳へは、耳立つて聽さづらい。ソレを近頃、物好きにも、大坂者が眞似て、ひと（人）をしと、時ひめを時しめと語る。イヤハヤ、抱腹の至りでないか、ソレで一方では、人の訛りの咎め立てをする、實に之れ絶倒せざるを得べけんや、と云ふ大事件だ。

或人の曰く「義太夫は大坂に限りません、他國の人がなんばよく語らしやつても、詞にテッが有つて聽かれません、マア思うて見やしやれ、同じかきと云ふ事でも、かきと云へば魚の牡蠣に聽け、かきと云へば菓物の柿と聽け、かきと云へば垣根の垣と聞こゆ、之れ全く大阪の發音の他國に勝れし處で、大阪は五畿内の首都で、昔は仁徳天皇の……」(自註、この上中下の符合は、聲の高、中、低に應用せしものにて、上は高く、中は中音、下は低聲と知るへし、これ古事記に、豐雲上野命(トヨクモノミコト)とある讀みくせに依りし、僕か一時の方便なり)

と、云つた様な事を言つて居る。さればかきと云へば、魚の牡蠣と聽ゆるとて、前後の關聯も無く、突然かきとばかり云ひ出して、果して魚の牡蠣と聽ゆべきや、よしなかき、かきでも、またかきでも、前後の關聯さへあれば、かき(垣)が、かき(柿)と間違ふ筈はないのである。譬へば袖萩が「このかき一重が鐵の」と云つたどて、正可こ、で此のかきを、菓物の柿と聽き違へるものもなからう。此れ等は訛りと云ふよりは寧ろ、言語勢に依つて、物其の物を云ひ顯はす事の出来るのだから、敢て大阪の詞の働さ、否

な勝れたりと云ふ証據にはなるまいと、思ふ。殊に或る和學者の「日本の語調（アクセン）は、紀伊大和を以て正しとす。されど中世皆な混和して正しからざるもの多し。されば中世以來の日本のアクセンは、尾張美濃に殘るを見る」と、云はれたり、斯る新説すらある其の上に。大阪には大阪訛りが有つて。大阪の言語が、日本の語源とも、また日本一の詞とも認定せられざる場合に於いて乎だ。

前にも云うた通り、義太夫は大阪の者でないとい語れぬ、となると、現今日本全國で義太夫に關係せし者は、先づ大阪の市中四區の内に、稽古屋商賣をする者が千五百人有一軒の稽古屋に三十人づくの弟子が有るとすれば、サツと五万人の淨瑠璃天狗が有る（文藝俱樂部、三十四年三月）市中四區に千五百人の稽古屋と云へば、一區四百人弱の割に當る、如何に大阪が、義太夫の本場と云ふと雖、之れは毫し誇大に失す。淨瑠璃雜誌に云ふ、現今市内の稽古所は八十七ヶ所にて、内譯すれば東區廿八、南區廿一、北區廿、西區十八ヶ所にて。これはいづれも豊澤、野澤、鶴澤を名乗る三味彈にわらさ

れは、竹本、豊竹を名乗る太夫にて、この他にもモグリの稽古屋澤山あるへし」と云ふ、このモグリ稽古屋を、正當の稽古屋の五倍と見て、約四百五十軒、一軒の稽古屋に三十人づくの弟子が有るとすれば壹万三千五百人、正當なる稽古屋を加へて惣計壹万六千人か。（參照。明治十三年八月四日の大阪新聞に云ふ「大阪市内に三業の者（太夫、三味彈、人形遣ひ）か六百人とすれば」云々、當時は四區にて、六百人前後の營業人ありしと見ゆ。また明治二十五年八月五日の大阪朝日新聞に市内住居の諸藝人の統計の載せし其の一節に「淨瑠璃太夫、七十九人。三弦、八十二人。女義太夫、五十四人。遊藝師匠、廿八人。（中略）其の他遊藝をなす者百十六人此の内人形遣ひも有るへし」云々）

大阪の義太夫の盛んなるは三十六年一月の小天地にも「毎夜市内に三ヶ所つゝの浚へあり」と云ふにても知れる。されど、廿二年の素人淨瑠璃名寄には、漏れたるもあろうけれども、掲載されしは約千名、五萬人と見積りし、文藝俱樂部の統計は最も信用すへからず。されば、これを話半分として貳萬五千人。ソレに半分は他國人と見れば純粹な大阪者は素人商賣人を合して壹萬貳參千人と見るが正當か。

東京は營業人男女合して八百四十一人（三十七年十月淨瑠璃と文藝）其の他、義太夫會員か六

千人。これに漏れたものも過半あると見れば、總括して壹萬人か。京都は明治三十五年十二月の『むら竹』に載する、市中の稽古屋が三十六軒、これに一軒三十人の弟子の有るものとすれば、約壹千人。名古屋は、三十八年の春の愛知因社の連名が男女にて壹百拾九人、これも一名に三十人の弟子の有るものとすれば三千五百六十人、其の他、全國八十三ヶ國を通じて、一ヶ國五百人とするれば四萬貳三千人、之れを多きに取つて約六萬人（此の統計概算にて正確ならず）とす。これを右大阪の人數壹萬參千人に對するに、約四倍の多きに居る。この四倍の多き義太夫語りは、大阪者で無い限りは皆、義太夫道のモグリで、太夫の資格は無いと云ふ歟。なんのわはうらしいソシな事が。

現今義太夫の繁昌するは、大阪の爲に繁昌するのでは無い、（其の証據は文樂の不入勝なるを見ても知れる）義太夫は義太夫の爲に繁昌するので。昔の交通の不便な世に有つては、或は義太夫は大阪の專賣物であつたかも知れぬ。大阪を義太夫發祥の地、文樂座を以て義太夫宗の大本山と云ふに就いては、敢て異論は無いのであるが。今日では、世の大勢

から云うても、最早義太夫は大阪の專賣物ではない、大阪の義太夫では無くて、日本の義太夫と云はねばなるまい。日本の義太夫は日本の義太夫で、一局部の大阪詞に、七六ヶ敷い研究するには及ぶまい。また訛りと云ふ事、發音と云ふ事も、眞面目に云へば。

「發聲の音曲ノ音ハ、聲音ヲ五種ニ區別ス。一ニ正直。二ニ和雅。三ニ清徹。四ニ深滿。五ニ周遍遠聞ナリ、正直ハ其ノ音ノ發スル天生ナルヲ云ヒ。和雅ハ雅致ヲ帶ビタル。清徹ハ清淨透亮ナル。深滿ハ重ク充實滿盈ニシテ。周遍遠聞ハ周ク普及シテ遠ク達スル事ナリ。而テ之レヲ概約スレバ、清ニシテ弱ナラズ。雄ニシテ猛ナラズ、流レテ越エズ、凝ツテ滯ラズ、遠ク聞ク時ハ汪洋トシテ峻雅ニ、近ク屬スレバ從容トシテ和肅ナリ。ト云ヘリ」と、また曰く「音曲ニ節ト調ト曲ト有り、節ハ發音ニ付スル賦ナリ、則チ五十音ニ就イテノ生字等ナリ。調ハ文ノ上ニ顯出スルモノニテ、假令ハ質直端麗ナルヲ唄フハ、自ラ發音其ノ儘ノ節ヲ發シ、簡潔朴淳ナルハ發音ニ節雅致ナラサ

ルベカラズ。重大ノ事故、或ハ尊長ノ發音ハ自ラ深溝ナラサルベカラサルガ如シ。曲トハ調ニ節ヲ折衷シ、或ハ節ノミニテハ曲ヲナサズ。調ナケレバ亦曲ヲナサズ所謂棒讀ト成ルハ當然ナリ、故ニ文ニ調ヲ顯シ、其ノ文ノ音ニ節ヲ付シテ曲ト爲ルモノナリ。音ノ節ニ因ツテ調ヲ出スアリ、調ニ因ツテ音ノ節ヲ加減スルアリ。實ニ一字一点モ擅ニ之レテ差略スベカラズ。若シツレ、此ノ節調ヲ失フ如キアラバ曲トハナラザルナリ。』

と此の論に依るも、訛りと云ふ事更に無し、されば、訛りと云ふ事の重きことにあらざるを知るべし。勿論、訛りは詞に有つて地合には無きもの故それで茲には論せぬにや。地合(節)に訛りは無きものとすれば、訛りは詞に限るものか。然り然れども、詞は詞で義太夫には義太夫の詞とて、一種特別の詞が有つて、尾張者の堀尾茂助(日吉)奥州者の政岡(先代慈)江戸ッ子の丈八(普八丈)京都者の長右衛門(帶屋)等も、別段に國々特有の國訛りで臺辭は云はぬ、國訛りを其の儘に語ると云ふは、白石噺のしのぶと油屋の万のくらゐな者で、夫れも實際は、其の所の詞ではない。新吉原の大黒屋宗六「北條殿と

云ふ、烏帽子親が有つたサカイ」と云つた。此のサカイは江戸ッ子の大阪訛りで別問題として。其の他は決して國訛りを其の儘に語りはせぬ、もし寫實であるからとて、政岡を奥州辨で、茂助を尾張詞で語つたらどんなものか。是れ音羽屋か堀川で本猿を使ひ、松島屋が三七信孝で本馬を使ひ失敗せしと同日の談で、適れ伎藝上の寫實と云ふ事を穿き違へた不了簡である。

謠または巡禮歌、その外義太夫の中に飲めた、各種の小歌を唄ふ時、コイツも寫實と云ふに氣を奪れ、實際の巡禮の唄ふ巡禮歌を研究して、巡禮の唄ふ通り巡禮歌を唄ふたら、乞食臭うてどうなるまい。他も亦れして知るべしである。

そこで地合も臺辭も、總てを義太夫と云ふ一ツの鑄型へ入れて仕舞へば、最早訛りと云ふべきもの、地にも詞にも無い筈である。吃又の女房の「節あることは少しも吃申さず」と、云ふも茲の事だ。忠七や新關や赤阪(彌次喜太)で、本行に無き惡洒落で茶利のめすどて、關東者の伴内や助平や彌次郎兵衛を、大阪辨で嚙舌ちらすが、大阪辨の功能

でもなからう。されば大阪辨、大阪の發音は、一段の義太夫の内で、何所で功能を顯はすか、ハテいぶかしき事どもじやナア。

攝津大塚も前に云ひし、鼻毛拔の説と同じく、『この淨瑠璃の聲はかりは、不思議にも大阪でなくては出ませぬ(中略)此の淨瑠璃だけが東京では修業が出来ぬ』と、こんな言を云つて居る、大塚は永く東京に居た者、東京で成功せしと云ふ程の者で、此の説の有るは、大阪に詣ひしにはあらずや、否や。果してこの説の如く義太夫のみは大阪でなければならぬと云ふ事なら、ソレは音に依るのか辨に依るのか、今一層明細な説明がさゝたいものだ。

もう一ツ毛色の變つた詠りの話をしやう『或人の曰く、詠りは單に聲に有るばかりでなく、音にも糸有る、聲に有る詠りは、地に無くて詞に有る。音(糸)に有る詠りは、詞に無くて地に有るものなり、此の言、矛盾に似たれども、決して然らず。假令ば三を放せしテン(い)と云ふ音に就いても、よく考へれば、時と場合に依つて、詠つて聞ゆる

時が有る、とばかりでは分るまい、が。同ヒテンの一撥でも、光秀の受けのテンと、久吉の受けのテンとは、善人と悪人との差別が有る。また帶屋のれきぬの受けのテンと、れはんの受けのテンとは、同ヒテンでもテンの味が違ふ。れきぬは三十越の女房で酸も辛も嘗つくし、充分に世間上の經驗に富んで居て、ソレで意地くね悪き姑や、腹黒き小鼻に仕へ、而も悪性な男を、蔭になり日向になつて庇保たてして居る、其の苦心其の思慮は、マア一通りの事では無い。ソレに反してれはんは、また十四五の小娘の、音に初戀に悩むと云ふまで、極めて單純な意志より無い。されば同ヒ女子で同ヒ愁にかゝつて居れども、れはんどれきぬとは、腹は大變違つて居る、其の腹の違つて居る、と云ふ事に心つかず、テンの受けはそれでも同ヒテンでよい、と思つて居るから、ソレで場合に依ると、音(糸)に詠りが出るのである』と、斯う云ふのである。此の説至極尤も道理千萬な説、でもなんでも無い。實は筋の通らぬ無茶な説だ、何故なれば、光秀久吉れきぬれはんはんに對する、受けのテンの差別は、三味線彈の心持に有

るのみで、音其の物にて光秀久吉、れきぬれはんの人形を弾き分けると云ふ事は、如何なる上手名人でも今時の人達には、至難な事だからで。畢竟前説のれきぬれはん論の如きは、人形の性格論で糸に關した事では無い。勿論三味線弾も、其の人形の性格を會得して居れば、撥音に緩急大小の差別が自然に出來、糸の爲に其の人形を弾き活す事もあらう、けれども、夫れは技藝上の巧拙と云ふもので、決して之れを音の詠り糸の詠り、と斷言する事は出來まい。と思ふ、然らば糸には詠りは無い歟、と云へば糸は素より地につくもの『地に詠りは無し』と、云ふが定義なれば、マア糸には詠りは無い、と云ふが穩かであらう。併、糸には糸にて、音と詠りと、云へば云はるゝ点もある。夫れは、三上より下る受け(ぬ)チン。また節尻の(かほろ、ほろ、ろ……)ツ、ン、ン、ツ、トン、トン、と云ふ手も、場合に依つては、緩急が有る、其の緩急を誤ると、間が抜けて聞き憎い。○(外にも澤山あるが)或は斯る場合を差して、糸詠り(へたる)と云ふのでは有るまい歟。○柳系亭三樂(豊後節の家元)の『老の戯言』に『三味線は腹にて弾いて手に

弾くな、弾けよ弾くなよ心しつかに』に云ふ一首の歌がある。是れ吾が意を得たるもの併、此の歌は、聲曲類纂に『堪能なる人のいひしは』と、前書して『節に節あり節に節なし、言葉に節あり、言葉に節なし、語るに語りて節に語るな』と、云へるを翻接せしもの、されば僕も此の風を學びて『一撥に喜怒哀樂の分ちあり、心して弾け手にて弾かずに』とこの外に、音詠りと云ふ事、僕は決して存じ不申候也、だ。

と、云つて見れば大阪人の、一子相傳、秘密秘法、全科玉條とも云つて、他國人を威かして居たテツ(なまりの事)も、鉦壹文の價値も無い譯だ、其の鉦壹文の價値も無い詠りを、今日でも尙勿體らしく、サモ六ヶし氣に振り廻して居るは、本人自らも、詠りと云ふ事を、左程には思つて居ねども、此の詠りを抜くと云ふ事は、學問でも利口でも金銭でも得られぬのであるから、此れを利器として、同黨異伐の道具に遣つて居るのではあるまいか、藩閥内閣の後繼者は、藩閥子弟の後進者が受ると云ふので、文樂座の取り語りは、文樂座の後進者より出すと云ふ藝閣から、如何に藝がうまくても、人

氣が有つても、他國の者や他府縣の者を加へぬので、其の他國の者を排斥するに第一の言ひ草が「藝は可なりだがアノ詠りでは仕様が無し」と、この一言で他國出の名人を、はいまぐつて仕舞ので、此の詠りと云ふ一件は大坂連中に取つては、地位を守るにまうた金城鐵壁の要害だ、其の証據は、小廿年も前に阿波から筆太夫と云ふか出たか、此のテッ一件でツイに本場所へは用いられなんだ。(蓋し斷つて置く、これは商賣人の事ではない素人衆の事である。商賣人で藝がうまくて、人氣が有つて、それで詠りの有る人はメッたに無いからナ。)

サテ斯う云つて仕舞へは、詠りと云ふものは一向に詰らぬもので、其のつまらぬ物に可憐三十年を、浮かゝと浮身をやつすとは、實の處つまらぬ上につまらぬ事なれども、文盲時代の學育としては、マア斯んな事くらゐを研究して居たものであつた。ッレに就いて思ひ出せしは、今は昔貳拾年も前今の攝津大塚が越路太夫で上京した、其の時の人氣と云ふものはタイしたもので、懸る寄席はどこもかしこも大人氣で、東京の義太夫界、イナ音曲界には非常な影響をねよほした。其の噂を聞いた浮れ節の吉川辰

丸が、ナンの越路ぐらゐ。見よ。乃公の腕前、ドッコイ、喉前をど、態々名古屋から上京して、八丁堀に看板を揚げた處サア當つたチ。来るはく。行く先きくも大入大繁昌、毎晩の客留め。越路は約束の期限が来て下阪したが、辰丸の方はいつく迄も大入の大繁昌で……

義太夫の方からは、辰丸が繁昌しようが、大入であらうが、敢て齒牙にはかけぬ、何所で風が吹くとも思はぬが。辰丸の方からは、越路をど。追ひ落したとの大氣焰。遊藝の司と云ふ淨瑠璃、受領まで下ざる義太夫と、素は大道藝人の蝶浮れ節(今の浮れ節、浪花節)との比較は、提灯と釣鐘、瓦と黄金、テンから競べ物にはならぬのである。其の競へものにならぬ物か、競争したとて、どうして義太夫が浮れ節に負やう、越路は辰丸にまけはせぬ。併、義太夫でも、浮れ節でも、清元でも、デロレンでも、上手となり名人となりし人の藝は、好き嫌ひは差置き、いづれもどこかに妙所が有つて、面白ものである。されは越路對辰丸の勝負は、藝の高等下等を云はす、御預りとし

て置くか至當であらう。そこで義太夫と浮れ節と、第二流以下で同等の伎倆の者が、或る場所で競争するとなると、其の勝敗はさうであらう。時と場所とを問はず、乍残念義太夫の方が負る。(吾黨に取つては一大警報)「コレは怪しからぬ」。「イヤきつと負る。ソレかまた妙だ」

義太夫の方では兎も角假名遣ひや品訛り、音訛りに就いては不充分でも注意して居るに浮れ節と來たらたまらない。重言、片言、國訛り、物の輕重、事の前後、一ツとして道理にも法にも、かなひし事なし、と云うてもよい。近頃尾上團十郎と云ふ浮れ節の頭取が組織した「浮れ節芝居」其のヤリ方が支那の芝居によく似て居るから妙サ」と云ふものは、頗る世間の好評を得たもので、到る處何所も彼所も大入である、と聞いた。僕もこれを名古屋の末廣座で見た、出し物は「野狐三次」の七日續の二日目であつた、末廣座と云へば、三千人も這入る定小家に立錫の地なしと云ふ大入で、ソレで語つて居る地及臺辭は、例に依つて例の如く、總てが無茶で、論にも賛にもかゝらねども、夫れで見物は

大喜びの大喝采、斯んな手爾波にも、修辭にもかゝらぬ無茶な言を云つて居て、夫れで大受大喝采と云ふは、不思議と云へば不思議だが、これは別段不思議とするには足らぬので、たゞ無教育の人間が多い結果、と云うてしまへばそれまでだ。嗚呼これを思へば、日本も教育の普及と云ふ事は、また中々に遼遠で、何んだか心細い様な、情ない様な心持がするよ。イヨ文部大臣様、よろしくれたのき申しますだ。

ソコで此の浮れ節の無茶な事を云つて見れば、譬へは「三代將軍家光が出て來れば、大久保彦左衛門様ワア静づく」として入り給ふ」と、濟した顔で語つて居る(ナマリもテッも有つたものでない。況んや産字切字に於て乎。だ)實に聞いて居ても冷汗が出る程なれども、ソレか此の客種には受がよい。この客種とて、全然義太夫の客種とは違わぬ、過半はいつれへも來る連中だ。ソレで此の連中(客種)の義太夫評に曰くサ「義太夫と云ふ奴は、聞いても一向わからぬ物で面白ない」と云ふ。と云へば「ソレや當然の事で、浮れ節には浮れ節の客種で、義太夫の如き高尚を物を聞いて分らぬはわまりまへの事で

ある。芝居好きや義太夫好きの人でも能や謡は見て聞いても面白くないと云ふと同一理屈で、元來趣味が違つて居るから仕方がない。もし俗受を專一として、能や謡を芝居好きや、義太夫好きに分るやうにせよと云うたとしてソレが出来たものではなうと、云うであらうか、夫れがまた間違つて居るからをかし。

能や謡の事は暫く置き(理屈はあるよ)先ツ義太夫に就いて云は、義太夫の丸本と云へばいづれも皆立派な學者が書いたもので(中には支離滅裂な愚作もあるが)素讀すれば義理判明。讀んで分らぬ、と云ふ事は無いソレを、下手な太夫が語るとなると「鳴戸で人を笑はせる」様な、彼我撞着、男女轉動、老幼序なしとなるから、かゝり結びや、手爾遠波の事なんぞは云はずもあれ。曲の上から云うても、地の文と、詞と混合する。かゝりもサワリもめちやくで。どこが地だか詞だが、聞く者の方ではサツハリわからぬ、と云ふも、尤千萬な事だ。實の處は、語つて居る御本人に於てさへ、譯はサツハリ分つて居ないのだもの。

それに反して、浮れ節の方では、丸本と云ふ結構な種本は無い。或る大太夫の語り本を見たが、それは「宮本左門之助の排々退治」で、半紙五十枚ばかりを假綴にしたもので惣平假名の鐵釘流で、假名遣ひや手爾波には頓着なく、飛びくの心覺えの乱れ書と來て居るから、一枚讀むにも大骨折で一時間もかゝつた。これが渠等の語り本で、この語り本の元は他人の説の聞きかじりや。又は世間に流布する小説本を、無學な頭で折衷潤色したものだから、本として見れば、譯も糸瓜もないつまらぬものだから、一度これが渠等の口へのぼるとなるとテツもナマリも、假名遣ひも、手爾波の論はさて置いて、人格判明、義理整然、三代將軍を呼び捨てにし、大久保彦左衛門を様附にする様な馬鹿氣た事を云つて居るにも拘らず、ソレが聞く者にはよく分り、なるほどなアと感心するは、抑々如何なる理由があるか。これには別段に不思議は無い。浮れ節連中は、根か文盲だから、文字の上に就いては研究をせぬが、そのかはり、人物の性格、即ち其の人物の表情と云ふ事に就いては、極

めて練磨したもので、南部太夫が、床で踊るとは違ひ、もう毫し野卑は野卑だが、よく舉動を以つて人格を説明す。それに地合、即ち節も、義太夫の大別四十八、細別約貳百種も有ると云ふ、ヤ、こしいのとは違ひ、概して十種に足りない節で、ソレで地合と詞との區域が判然として居るので、單純な聞人には、事の譯がよく分ると云ふものだ。此の場合にナマリもテツも産字も引字もいるものか。

淨瑠璃の始は小野れ通、と云つた様な事は、今更に説きでもなからう、尤このれ通と云ふ事に就いては、多くの異説もあつて。此れを述べやうとすれば、事多岐に涉つて面倒だから、ソレは後日の事として。サテ義太夫は素より、豊後、清元を始め、糸に依つての語り物は、平家琵琶(琵琶には、平家琵琶の外に、薩琵琶と筑前琵琶との二ツか有る。ソレに對しては、僕にすくなくからぬ説があればとも、例の通り、永くなるを恐れて茲には略す)を除くの外は、總て淨瑠璃と云ふべきのもので、其の祖先は、兎も角小野れ通なる事を認むる事が出来る。ソレに反して、今も云つた下等音曲とは云へ、現今音曲界に大勢力を有する淨れ

●(浪花節、蝶浮れ節)の祖先、即、開祖はなんと云ふ人で、何時頃初めたものであらう、浪花節と云ふから大阪で出来たものか、さては義太夫とは同國者歟と思へば、イヤ浪花節の名は維新以後の名で、維新前は、日本中何所へ行つても、チヨンガレ節で通つて居ものだと云ふ。之れを淨れ節の連中の二三人に聞いて見たが、文盲な人の多い連中だから、なにを聞いても、薩張り分らぬ「ナニ乞食藝の淨れ節に、祖先だの開祖だのと云つた様な者が有るもの歟」と、此れはまた不都合な御詞だ。假令乞食藝でも大道藝でも、ヤリ始めた人は有るに極まつて居る。乞食の子でも天からも降らねば地からも湧ぬ、矢張人間の腹から生るゝ同一で、必ず發明者が有るに相違ない、果して發明者が有るとなら、其の發明者の名前ど、年月が調べて見たいものだ。東京には俗曲研究會と云ふものが有ると云ふ事を聞いて居るが、まだこの方へはれ手が廻らぬと見える。と云へば「如何に閑暇が有ればとて、淨れ節の傳來なんぞ調べる間拔が有るものか」と云ふ。イヤそうでないよ、假令異端でも外道でも、大道藝でも淫祠でも、天理教は

と流行つて來れば、立派な國學者でも、佛教學者でも、一應天理教の教理を調べて見るは、宗教家としての義務で、いして待勞と云ふものでない。俗曲研究會か、俗曲中の俗曲たる、浮れ節の研究するは最も其の本分を盡すと云ふものだ。ソコで、浮れ節を吾國の宗教に譬へて見れば、宗教と云ひ得れば、浪花節はマア天理教歟、糸に就いて語るものは義太夫でも、清元でも豊後(常盤津)でも、皆淨瑠璃の一系統で、佛教が、八宗九宗と分れて居ても、其の根元は釋迦の一系統で有ると同じで、それで之れを佛教の各宗に見たてゝ見ると一中、宮古路は華嚴、法相で云ふに足らねど、義太夫を禪宗とし常盤津を日蓮宗とし、杵屋一派を眞宗として、而してこの一系統を引きし、佛教各宗の信徒を、エタイの分らぬ、天理教の浮れ節の爲に、誘惑せられつゝ有る有様では無いかエタイが分らぬと云へば、天理教の教理が、神佛二道に涉つて曖昧なると同じく、浮れ節が糸に依りし語り物なるにも拘らず。或時は「浮世講談」または「音曲入講談」など講釋師の畑へ迄手を延して居るは、天理教の教理が神佛二道へ涉つて居るのと、

よく似て居て一寸れかしい。ソレで糸に就いての語り物は、高等音曲(稱して)の平家琵琶と、この下等音曲の浮れ節が、淨瑠璃と云ふ範圍に外れ、両極端に對待して居るは、妙な現象ではあるまい歟。コイツ一番研究するも滿更無趣味の事でもなからう。ナニデロロン左衛門はどうだ、ど。ウムあいつも浮れ節と並んで、下等世界には侮り難き潜勢力は有るが、アは糸には關係は無い、貝吹いて居るから、俗に貝左衛門と云ふ、法螺吹だもの、茲に論ずる必要はないサ。

物は單純より複雑に入るが數で、下等は單純で、高等は複雑なもの。十種に足りない浮れ節の節は下等で、二百余种も節の有る義太夫の節は高等なるは論は無い、高等で節が多いから悪いと云ふので無いがノルとハルのわからぬ者にノルとハルの説明もせず、教へもせず、教へてくれるはナマリとテツの事ばかり、之れでは丸ツきり、砲兵工廠へ行つた様なものだ。テツやナマリが直つたとして、節の差配や人物の性格は分らぬ筈だ、其の筈これは教へぬのだもの「理屈で義太夫は語れぬ」と云ふ憲法を守るから

だイヤ斯んな憲法が有つてたまるものか、教へぬのでない、教へ得ないであらう。ッ
コで御都合でもつて、テツとナマリの小言の外の、學問上の事は總てヌキにして、都合
上月謝取立主義、札賣主義にて無暗に段數を教へて、無暗に乘せるから、盲蛇の素人
天狗が、ツイ本文を語り破す。文學上の素養の無い上に、伎藝に鍛練を欠いて居る者
が語るのだもの、本文を語り破すのも尤だ。語り破すから譯が分らなくなる、譯がわ
からないから、下等音曲の浮れ節に負けるといふ事になる。嗚呼これは抑々誰が罪だ、
下手な太夫が悪評を受けるは、自業自得で不止得が、こんな場合で「義太夫は分らぬ
物だ」にして仕舞ふは、其の流を汲んで家業にして居る者共は、先祖の義太夫にも、
昔の作者の方々へも、これでは申譯が立つまいがな。

然り而して見れば大阪詞の練習と云ふ外には、別段テツ、ナマリと云ふ事に、重を置
く必用は無からう。

されば無學文盲なるは、單に浮れ節連中はかりでもない、前にも云つた通り義太夫連
中にも素人は素より玄人にも澤山ある。夫れに就いて、思ひ出した實際の滑稽談。ソレ
は今を去る廿五年も昔の事だが。今なれば「義太夫研究會」と、でも云ふのであらう
その頃の事として「藝道相談講」と名づけて、吾等同人十四五名、先代の土佐吉の宅へ集
會した。其の時の問題は○第一、太十の初菊の親の名前は如何○第二、梅川どれ俊ど
はいづれが貞女なるか○第三、太十の『どゝめて』のてはでなる事○第四、鹿ナドリと
シシナドリとは異名同物か○第五、忠六の「勘平よ、もや／＼／＼」とは思へども○第
六、忠臣藏のわかるの年齢を問ふ○第七、熊本城と名古屋城（願八陣）「また有つたか忘れた」
等にて、一より五までの問題は、いづれも出題者の説明が有つて、皆々感心。殊に「勘
平よ、もや／＼／＼」では大笑ひ大喝采であつた。ソコで、第六の「わかるの年齢如
何」と、云ふ題に至つて、出題者可甲は説いて曰く「芝居で見ても、十六七、師匠に
聞いても十七八の心得で語ると云はるゝが、僕が思ふに「勘平さんは三十二なるやなら
ぬ」云々と云ふからは、勘平は年弱の三十二か、或は三十一でありしならん、よし三十

一とした處で、十七八の娘と三十越の男と私通するは不似合の事ではないか、後半長右衛門と云ふ不釣合の色事もあれども、これは例外で「三ッ違ひの兄さん」位が色事としては最、相當であらう。彼の祇園曙に、ね輕を顔世の身代として、師直に會する處がある顔世の年齢は廿四五才にして、決して十七八才の者ではない、如何に師直か老眼なればとて、十臺の者と、廿臺の者と見誤るやうな事はなからう。また、一見して年齢で直さ化の皮の顯はる様な、下手な身代も遣ふまい。シテ見れば、ね輕は廿才以上の者なり、と云ふに異論はなからう、されば勘平は三十二で、ね輕は廿八九でよさそうに思はるゝが、皆さんはなんともし召す、御意見もあれば御遠慮なく」と、云ひも畢らぬに「馬鹿な」と、一喝せしは、日頃この可甲と席を爭ふ、乙登と云ふ、淨瑠璃は下手だか、學者を以つて自任するハイカラ男、咳一咳して破して曰く「可甲にも似合ぬ、勘平さんは三十にと云ふには、手爾波のにである、ソレを、數字の二と誤り讀むなんどは、殆ど論するに足らない事だ。よし勘平が三十越であつたところで、三十男

の十七八の娘に通ずるは、世間にいくらも例の有る事で。師直が顔世へ送りし、艶書を書きしと傳へらるゝ兼好法師は、徒然草に「廿ちかへば夫婦になるな」と、書いて置いた、と云へば、十チや十五違つたからとて色になられぬ譯はない。素より、には二はでく、手爾波のになれば、勘平は廿七八と見るが、適當で、十七八の娘に通じたとして別段不思議と稱するに足らぬ。ソレに、昔は今と違ひ、女郎の年明きは二十五才(或は二十七)で有る。もし可甲の云ふ如く、ね輕が廿七八であつたなら、何を見込んで一文字屋が、大枚百兩と云ふ金を出そう、ね輕は醜婦ではあるまいがさりとて、絶對的美人でもなかつたであらう、勘平や伴内の一人や二人に惚られたからとて、夫れが美人の証據にはならぬ、もしね輕か絶世の美人なら、好色者の師直、(祇園曙の)顔世の本人と代人とに拘らず、ね輕に戀着すべきであるに、其の事なきは、ね輕は十八並、鬼も十八的の女で有ると云ふ事が出来る、此の十八並の女に、百兩と云ふ大金を一文字屋が出すと云ふは、年が若いから、永く勤がさせられると云ふ處に、見込を附けたは無論

の事だ、斯んな事は問題とする迄もない九本、九本でなくもさらかね本でも讀めば直ぐ分る、エ、馬鹿々々しいと云ひ破れは。可甲も躍氣となつて「僕も九本は讀んだ、憚りながらまだ其の頃はさらかね本は出来て居ませんよ。乙登さんは無暗に本の事を云わるゝが、さらかね本と違ひ、校正の杜撰なる、五行本なんぞがそんなに當になるものか、本よりもまた確な、當時若女形の名人と云わるゝ秀調のれ輕が、僕ばかりでもなく數千人の面前にて、公然と勘平さんは三十二になるやならぬと公言した、此れ程確な証據はあるまい、ソレを頭から、馬鹿なんぞとは失敬千萬、そんな丁簡で居るのだから、いつの會でも浚でも、見物から鎗を食ひ、耻を撥くのは當然だ」と眞ッ赤になつて遣り返す、乙登ひるます、嘲笑ひ「無學者論に負けずと云ふ、可甲如きの無學者を相手とするも大人氣なければ後學の爲よっく聞け」と、云ふを云はせず「ナニ無學者と吐したな、誰が無學者だ、馬鹿者奴」と、榮螺の様な拳を固め、首も曲れどハタと撃つ。撃れて乙登も負けては居ず「なにしゃがる」と、武者振り附く。降つて湧だる

修羅場的一幕。そばなる人も氣を吞まれ、唯ボンヤリと見て居るのみ、誰とりれさへる人もなし。茲に青柳兩庵と云ふ盲人あり。と、堅く出るにも及ふまい。此の兩庵僅に晝夜明暗を分つ視力が有るものから、他人からは盲人でも、自は近眼ぐらゐと思つて居る忙て者、近頃東京から流れて來た者なれども、素は魚の棚(名古屋邊)の豪家の妾腹の子とやらで、身形の見苦しき割合には、賤しき舉動のなき者にて、一寸三味線も弾ける、三味線も弾ける處から、聞取法問の耳學者ではあるけれども、音曲の事はなんでも一通りの斷は出来る半可通。殊に清元は、家元相傳の藝と云ふ程あつて一寸うまい。名古屋には昔から、清元も有つたであらうか、今日の如く裏屋の隅で、北洲や夕立を聞くまでに、清元の流行するは、全くこの兩庵が鼓吹した結果で有る。と思はるゝ程の者、ソレが今日この相談會の發起人の一人で、自はこの會の議長とか取締とか云つた様な、地位有るものと思ふから、態と遅刻して、皆の者に氣を揉まして呉れんすど、飛んだ處に野心を起し、今やう／＼ヤッア來て、見れば思はぬ座敷の騒動、

ハツと思へどそこは両庵、ズツと澄して聲高く「暫くく。乍延引青柳両庵、それへ参つて御兩人の、れん怒りを宥め申さん、暫くく、それに御扣へ下さるべし。ヤ、テンく」と、嫌身たつぷり。イヤに氣取つて中仕切りの、障子カカリと引き明けてツト這入つた庭の隅に、段梯子の、有るを見附けぬ盲人のかなしさ、イヤと云ふほど額を打つた。普通の人間なら、こゝで目をも廻すところ、ところが、盲人の難有さに廻す目もなく鼻血混々。一座の連中惣立ちにて「ソレ両庵さん鼻血が出たよ、此所にも其所にも、ッレく血か溢れる」との大騒に、可甲、乙登の争ひはどこへやら、鼻血の掃除で大騒動。その時両庵すこしも騒かず、高くもあらぬ鼻を押へて「我れ目にこそ聊か故障はあれど、耳は順風耳の奇術を用ゐる、今兩君の争ひは、疾もつて聞き知つたり抑々兩君の争ひは、互に藝道未熟の爲、初心に依つて起るところ……」可甲の怒氣未だ全く治まらず、今この高慢チキか口上を聞きて、いかですなほに通すべき、言をも云わす両庵か、右の腕をグツと捻ぢ上げ「此の奴盲人がナニ吐す、ソレ程貴様がエ

ライなら、貴様の出題の入陣の、七星丸とは、人の名か、物の名か、サア直ぐに返答せよ」と不意の質問、烈しき詞、両庵素より、この位の事に閉口すべき者ならねど、事総てが意外に出て、面喰つて居る折柄とて「ナニ七星丸、ア、痛い、アノ七星丸か、アレは、ア、痛く、痛く、痛く七星丸だ。馬鹿、七星丸とは清正に乗つて來た船の名だ、馬鹿奴、自分の問題さへ答辨が出来ぬくらゐで、人の事を初心だの未熟だとはウヌ、どの口で吐した、此の口か」「ア、痛く」「ウム、モッ一つ問ふぞ、この返答が出来ぬと、此の連中を省くからソウ思へ」と手を放して突やれば、両庵は蘇生た心持ち「サアなんなど問へ、今は暴力の爲、口が利けなかつたのだい、今度はどんな問題でも、奇麗あざやかに答辨するぞ」と、口は立派に、早ヤ逆仕度をして居るに。夫れには構はぬ可甲か權幕「コレヤ両庵、アノ八陣の次はなんだか知つて居るか」両庵ヤヤ安堵せし思ひ入れにて「フム、八陣の次か、ソレを人に問ふ事か、八陣の次は云ふ迄もない、昔から九陣と極まつて居るではないか」ト、ソレスト、ソレ。

サテ斯んな事は、昔話ばかりでない。是頃或る所に、辨護士連の素人天狗が團結して杉木會と云ふを組織した、流石に辨護士連の事とて、無學な人は一人も無い、皆な高等な教育を受けた人達とて、權利だとか義務だとかの議論に於いては、敢て人後に落ちねども、素養の無き義太夫の事とて、淨瑠璃に就いては折々絶倒する程の珍談もすくなくない。過日も此の連中の催しの有つた時、樂屋に於いて一人の辨護士が、鬚鬚ひねりつ、「今、語つて居る日吉の三に出る齋藤龍興と云ふ男は、素と江州の油賣で有つたが、出世して美濃の國主とまでなつたれども、信長の爲に亡された、其の時、龍興の末の子は、伊勢の古市に通れて、女郎屋を初めたが、非常に繁昌して今日まで連綿として永續して居る。かの伊勢音頭の油屋がそれさ。ナニ名字が違ふと、ソレヤ當然さ、當時は世間を憚つて異性を名乗たものだ、此の事歟、此の事は太功記の劔の巻と云ふ書物に整然と出て居る確な説だ」と、眞面目な顔して述べて居た、太功記の劔の巻もをかしいが。貢の刀が青江下阪と云ふ處から、劔の巻と云ふ事を思ひついたもの

か、これは淨れ節連中や、相談講の人達とは違ひ、教育が有るだけ罪が重いと云はねはなるまい。サテ話がまた横道へ這入つた。閑話休題として。

今は、誰も彼も目に多少の文字は有る、此の文字を利用して、學問上で出来る研究は學問上であるがよい。學問上の研究が進めば、自然に人形の性格が分つて来る、人形の性格さへ分れば腹が出来、腹が出来さへすれば、下手は下手なり聞けるもので、鳴戸で人を笑はす様な事は無いものだ。

學問と云つた處で、職務でも無い、娛樂の爲に語る淨瑠璃の爲に、多くの時日や金銭を消費する事は出来憎い事であるから、なんぞ手取り早く、早分りのする物を著述したらよからう、と思ふ事茲に年あり、種々な人にも相談はしたものの、天二物を生せずとはよく云ふたもので。學有る人には藝が無く、藝の出来る人は先文盲が多いと云ふものでありとて修史局を設けて著作しやうと云ふ程の事で、ないのは素よりで、思ふのみにて、今日に至つた處、今度其中堂から「さらかね本」を發行すると聞さ、こ

れ幸この機會を利用して、充分で無くも、弟子衆の爲、せめては作の大體でも知らしむ様、解題風の物を一枚づゝ、巻首に加へたらどうであらう、と版元に云へば、ソレよからう、早速に書いて呉れよと、版元から折返しての頼。處か實は僕も安政生の茶瓶黨の一人で、淺學寡聞は云ふ迄もない、素より筆もつが職業でもないのだから、文章の拙いも當然だか、この場合、誰れ彼れと人頼して、機を逸せんは初志にも背き、斯道の爲に、忠義にもなるまい。マ、よ「せんぢやく」の藥は「せんぢやく」病が買け來ると、不文無學を省みず、大膽にも筆執る事に、決心はせしもの。サテ弱つたは材料書の欠乏で、圖書館の無き名古屋。また斯道の先輩として、分らぬ事を聞きに行く程の人の無い名古屋での著述三昧。其の不自由さは言語同斷。其の上、身は忙かしき商人の、帳場の内が編輯局。出納帳やら丸本やら、淨瑠璃雜誌と營業通信。それがどれやら分らぬ迄に、取り散したその中へ、友人の訪問、顧客の應接、加ふるに日々十通以上は、手代まかせにならぬ書信の往復、目が廻る程忙かしさ

に廻らぬ筆はなほ廻らす。コレヤ飛んだ事に引懸つた、と悔んで見てもあとの祭、不承々に筆執つて、ヤツと百段書き終つたは此の「語り物の譯」で、此の著述に就いての骨折と云つたら、イヤモウ並大抵の事ではない。ソレで。書上げて見れば「なんだ詰らぬ斯んな物」なれども、之れに要せし参考書が千冊以上、其の上東京及京都の圖書館へ取調の爲出張した、とは、人層な事の様だが、事實だから驚くではないか。その驚きの上に、モウヤツ驚くは、参考書に就いて取調べた結果が、暗記と相違して居たのが、百中の五六で、他は暗記の通りであつた、とは驚くではないか。其の上まだ驚くは、参考書として見しもの、内に、讀賣新聞に出でし「紙治考」で、此の紙治に就いては、僕は頗る苦心をした。其の譯は……その中でも、竹中の「淨瑠璃外題目錄」に「紙屋の段」とあつて、下に「綱太夫場」と「宮戸太夫場」と二行になつて居る。此の綱太夫場と、宮戸太夫場との譯がトント分らぬので。参考書は素より、廣く斯道の人々に就いてたつねたが更に分らぬ。折柄(二昨年十一月)大阪の文樂座で、この紙治の

●通しが出たので、態々聞きにまで行つて取調べて、ヤット「就いて」を書き畢り、彫刻は出来た、此の彫刻が出来てから二ヶ月も後に、讀賣新聞に「紙治考」が出た。ソレをよく見れば、殆ど僕の説と同説で。尤も僕の説は、版本の彫刻は出来たもの、此の時はまた發行前であつたから、これは全く、彼我の考へか暗合せしと云ふもの、何んだか之れを見て、骨折損をした様な心持ちがした。又本藏の下屋敷に就いても、僕は僕で作に就いて批評をした。ソレが是の頃に至つて、大阪の淨瑠璃雜誌を見ると、僕より先きに、大同小異の批評がチャンと出て居る。之れでは、参考書を見て参考とせしでは無く、参考書を見る度に、自己の骨折か消滅する様な場合で、なんとどう不愉快な心持だ。

と、云つた様な譯で、大骨折で拾出した材料を、書いて見ると長くなる。版元の注文は、三十字詰廿四行の原稿紙一枚だから、なか／＼に這入らない。儘よ、折角見出した材料だもの、捨てるも惜しいと、寺子屋、忠七、本藏の下屋敷と阿古屋を二枚つゝに

書いたら「斯う長くては彫刻に手間が入る」と。版元から大眼玉とは、驚くではないか、版元の曰がよ。師匠がそんなに、骨折つて書かれたとて、真面目に讀んで呉れる人は千人に一人も六ヶ敷。マアよい加減にして置くがよい、本の體裁さへよかつたら夫れ迄で、こんな事に、そんなに骨を折るには當らないサ」とは、こいつも一番、驚かざるを得ざるではないか。

此の調子では、僕が近日出版しやうとする「竹豊秘曲録」も定めて賣れぬであらう、讀んで呉れる人は無からう、と此所許一寸とふさぎの虫サ。

『だが、其様に力を落すにも及ぶまい、書いてさへ置けば、千人に一人や、萬人に一人は讀む人も有るであらうから、思付いた事が有つたら、遠慮なく書くがよいサ。その中僕の方で、手際次第に出版してあげますから』と、今度は更に版元が勸めて呉れるので衰へた勇氣を復興し、茲にも「語り物の譯」に直接の關係ある「章」と「出し物」と云ふ事に就いて、なほ二ツ三ツを、話のついでに述べて見やう。

或人の「さらかね本」は、實に結構だ、紙もよく摺もよく、墨もよいから匂ひもせねば手にもつかぬ。表紙の意匠も面白ければ、製本も丈夫でよい。字は大字で、四行で、ソレで假名遣の正格なる。のみならず、古人未發の大發明の段落、人形割から地と台詞との區別をたてたなんぞ、實に感服の外は無い、誠に斯道の爲には偉大なる功勳と云はねならぬ。然れども、茲に一ツ惜むべき欠点がある、ソレは「章」の事である。○(章とは俗に節付または墨譜とも云ふて、義太夫節の曲譜なり) 假名遣を取調べたと共に此の章に就いて一層正確なる取調べをしたらんには、實に完全無欠のものなるべきを。僕は既刊の分三拾段を悉く見しどにはあらねども、一寸見た二三段にも少なからぬ誤謬がある。希くは以後の出版の分は、其の道の先輩に就いて研究し、後輩の誤らざる様したきものなり」云々、と、云はれたり、其の賞辭は敢て當らず。然れども、章に就いての御注意は深く感佩する處である、實の處を白狀すれば、この章の事に就いては、最初非常な苦心をした。ト云ふ譯は。今坊間に散布し有る五行本の章は、それにもこれにも

誤りがあつて、二三冊引き合せて見ても、一定しては居ない。また丸本に就いて見るも、ノルどハルどに欠字磨滅字があつて。判然せざるも澤山有る。その上、丸本は皆一版の物なれば、イヤ再版して、現今二版ある物もあれども、初版と云へば、いづれも十行のひらかな本が多くて、章の比較本にはならぬから。異本を以つて校訂するの便宜は出来ぬ。されば、先輩に就いて聞かんか。例の「藝道の秘密を訂くを恐るゝ」など、云つて、知つて居る事でも容易に云はぬ。

僕は江戸冷泉と云ふ節の分らぬ爲、十七八人の師匠方に就いて聞いたが、知つて居る人は無かつた。(それが。音曲阿節辨にも秘曲抄にも確乎と出て居る) 假初にも稽古所を開いて、義太夫で渡世して居ながら、義太夫節の一ツの、江戸冷泉を知らぬと、云つた様な、便り無い師匠方に就いて、今更に章の確定をしやうとは、木によつて魚をもどむると同じで。到底出来ない相談で。名人團平及先師伊八郎没後は、殊に禮を厚くして相談かけやうと思ふ程の人は無い、と思ふは非か。然り、全く一人もないのであつた。

ノル、ハルは欠字磨滅字で讀み難くも、糸にかければ其の疑惑の自ら解決すべき道もあれども、ユル、アクル、の胡麻章に至つては、誤格欠字の爲に、どう研究しても解決しがたき節も澤山有る。

僕の所蔵する酒香童子の丸本(木下甚右衛門、正版)には○○○(九三三ならべた)こんな章や、こんな節が澤山ある。其の上「イロナガシ」「モロナヤシ」「大ムスビ」と云ふ妙な節附もある。ソレで奥附には例の如く「右此本者土佐少椽橋正勝直レ之以ニ章句」附「秘密音節」逐ニ校合「令ニ開板者也」と、書いてある、シテ見れば、この章も今でこそ不分明なれども其の當時は普通に行はれし章であらう。其の後、享保元文以來は、丸本の章も大略一定はして居れども、語り口は漸次に變遷して居るに違ひ無い。現に坊間に流布して居る五行本の章と、今語つて居る節と相違して居るのも澤山あるからな。

墨章を以て、樂譜として傳はつて居るものは、獨り義太夫節ばかりではない。古くは魚山の聲明、平家正節、謠曲、禪宗の羅漢講式、眞宗の御和讃等なれども、これとて

も、時代時代で改正節とやら、直し入りとやら、新節とやらで多少變遷して居るは事實である。

其の一例として見るべきは。早稻田文學(廿七號)に鐵笛子と云へる人が、樓門の段の一節を、西洋樂の樂譜に當嵌め、尙「(前略)吾が邦ノ俗曲ハ、總テ樂譜ヲ使用スルコトナク所謂口授ヲ以ツテ傳習スル慣習ナレバ、固ヨリ古譜ノ一ツモ今日ニ存スルモノアラズ、コノ曲成リテ、コ、二百八十九年ノ間、依然筑後椽ノ原作ヲ保存セルモノトハ斷言スルヲ得ザルベシ、故ニ文詞ノ上ニテコソ巢林子ノ作、ソノ儘ナ今日是非スル事ヲ得ベケレ、曲節ノ上ニテハ、元祿ノソレヲ研究スルノ便トハナラザルナリ、按フニ、元祿爾後技藝ニ巧妙ナル語手輩出シテ、時代々々ノ好尚ニ適ハント努メシ結果ハ、不知不識ノ間ニ演者ナシテ、各自ノ伎倆ニ應ジ、多少面目ヲ革メ來タラシメシモノナルベキカ、コハ獨義太夫節ニ於イテノミ然ルニアラズ、口授ヲ以ツテ傳ハル音樂ノ常弊ナリ、サレバ樓門ノ段ノ如キ、既ニ駒太夫節ト特稱サヘ付ケ加ヘタル箇所アルヲ見レバ

タトヘ全曲ノ改作ニアラザルモ、音節ノ抑揚緩急ハ多少ノ變易ヲナシタリシコト、蓋シソノ證ニアラズヤ、所詮、義太夫節ハ、大體ニ於イテ古傳ヲ失セザルモ、時代ト趨勢ト技藝ノ發達トニ伴ウテ、今日ノ成功ヲ見ルニ至レルモノナリ○(下略)云々と云つて居る。

ソコで、この節を樂譜に依つて聞けば、義太夫的の趣味は無いか、一通り節は分る。處で、この節は平常僕が語りもし、彈きする節とは違ふ。吾が先師鶴澤伊八郎は、昔風の藝人には珍らしき文學趣味の有つた人で、平常の日記の如きも、三十冊も書き残して有る程な筆健な人で、ソレで、節の事に就いては、人も知つた、頗る付きのヤカマシャで有つたから。この人の所持本は、どんなであらうと出して見ると、これはまだ、鐵笛子の譜とも、僕の覺へて居るのとも違ふ朱が這入つて居る○(朱とはイロハの符合を用ひて三絃の手を記すものにてこれを書とも章とも云ふ)○サレば前に載せし鐵笛子の議論は至極尤千萬な事で。義太夫には万代不易とか、古今一定とか云ふべき曲節は無い、と云

つてよい程である、シテ見れば、この章と云ふものも、時と人々に依つて異なるは當然の事で、時と人々に依つて異なるものを、一定しやうとするは難中の難事で傳界では、神佛の如く尊敬せられし剛平すら、終身の事業として企てた、章譜改正と云ふ事は、僅に二十段にも満たなんだと聞いて居る。

ソコで、この「さらかね本」發行に際して、この章にも改正を加へやう、として、其の道の人二三人に相談して見たれども、今も云ふ通り、章に一定不變と云ふ標準が無いのだから。其の相談が纏まらない、其の中にも、或物の内に「表具」と有つて、ソレで「文彌」で語つて居るものが有る。表具でも、文彌でも語ればどちらでも語れるからサア議論が持ち上つた、一方では、本の通り表具で語るが本統だ、と云へば、また一方では、本は兎も角、僕は師匠から文彌で習つて廿年來、その儘文彌で通して居て、敢て差支へもせねば、人に笑はれもせぬ、元來、文彌、表具と云ふ節は、聲曲類纂の「節章句早覺の事」にも「表具と云へるふしはまた、文彌に似たる物なれど、其の品々の

一流と』と出て居るからは、どちらで語るも、タイシク違ひはあるまいから。別段今日は、これを直す必用はあるまいと云ふ。されば、前後の節配りはどうだ。文章の意味は如何。と、甲論乙議、夜を轍しても決着せぬ。ソコで議論は三日に亘つて漸くに、此の議論の解決を得た。ソレは或人の手扣の内に「文彌は人の出入に多く用ゐる(中略)表具は多く愁に用ゆ」と、見たりと、云ふ説の出たれば、さればとて此の一件は、文章が愁なれば、矢張り本の通り表具と決定せしもの、文彌党は飽迄自説を、固執して、同意の色をなさぬのである。のみならず、話の枝に花が咲いて「色」「サワリ」「カ、リ」等の点にも及び。議論百出、殆ど停止する處を知らずで。

『高慢や自慢は知恵の行き留り』と云へば、高慢なことを云ふは、僕の知恵の底をはたぐに似て、れ耻しい事なれども、僕も若い時から多くの師に就いて、耳には澤山な講釋も聞き、目には澤山な書物も読んで居るので。マア斯の道に於ては、牛の尻尾ではないか、モウノシリで有ると思つて居たが。サテこんな知れ切つて居る「色」や「サワ

リ」に就いてさへ、研究と云ふ事になると、どうして。種々の異説が出て、なかなか一言の下で、判決を下す事のならぬ点も澤山あるので。(委しくは秘曲録で云ひませう)實の所は僕も弱つた。コレやなまじしいに、改正騒ぎをするよりも、寧ろ、わりのまゝ、注意して、書かしても彫しもするがよい。元來この「さらかね本」は、章や墨譜を見て、語れもし、弾かれもする程の人に賣る目的でない、云は、男女老幼の區別、地の文と臺詞との境界の分らぬと云ふ、極く程度の低い人達の爲に、便利を與へやうとするのが大目的だから、章や墨譜にまで立ち入るにも及ぶまい、と。斯う決心したものでそれで、實の處章には重きを置かぬのである。イヤ重きを置かぬのでは無い、置かれぬのである。

御忠告に對しては、實に感謝の至りに候得共、何分右の次第に付き、思ふのみにて力及はず候間、此段不惡御了承被下度候、尙この章に就いての御名按、并に御心附の事も有之候はゞ、遠慮なく御示教奉願上候。と、名門二は申し居り候。

また此の淨瑠璃の語り物は、元來季節に拘らぬ事になつて居る。ソレは通し物になれは、夏祭浪花鑑や太功記等を除く外は、大概は、全部の内に春夏秋冬の四季か有るから、何時なにを語つてもよいやうなもの、一段物となれば、其の季節の物が選んで貰いたい、寒中に涼みや、瀧。土川中に、雪中の山水や、寒牡丹の懸物を床に懸けて「妙デス、甚暑ノ折デモ、名筆ノ畫ハ不思議ガ有ルモノデ、御覽ナサイ、此ノ雪ノ景色チ見ルト、出タ汗モつめたく、ナツテ此ノ通り冷汗ガトク／＼ト出マス」なんて、獨ヨガリの通人は別物として。ならう事なら、此の語り物の其の季節々々の物にしたい。聴衆か寒くて戦ひ上つて居るのに帷子物の夏祭、汗を拭いて居るのに安三の雪。どうも情の乗らぬものだ。根が感情を語るものだから、出し物も時相應な物にしたら、一層興味が多からう、と思ふがどうか。

この事は、芝居道では古くから云ふ事で、其の狂言の四季の區別と云へば。春は「曾我」にて花麗さを専らとし、夏は世話事。「五ッ厂金」とか「夏祭」の類を宜とし、秋は

時代物にて「先代萩」「忠臣蔵」等を据ゑ、顔見世(冬)には賑はしきを撰ひたり。其の道の者は「季節に應せざる狂言に當る理なし」と云ひ傳へたり。これ吾が義太夫界に於いても服膺すべき事ではないか。

此の問題、別に六ヶ敷い事でない、最初から稽古するものに注意して、四季の物を一段つゝ稽古すれば、ソレで一年中不自由せぬ譯だ。この百段の季分は別表の通りだ。尤是れは何れも陰曆で有るから、其の積りで見るがよい。細かくすれば初春(正月)中春(二月)晩春(三月)とも分けらるるが、サテそれ程までに及ぶまい。

◎ 春 之 部

- | | | | |
|----------|----------|---------|----------|
| ●一ノ谷陣屋 | ●同 須磨の浦 | ●伊賀越圓覺寺 | ●妹背山山の段 |
| ●二度目寺岡切腹 | ●加賀見山草履打 | ●同 長局 | ●忠臣蔵三段目 |
| ●忠臣蔵四段目 | ●蓮如上人嫁成し | ●嬢景清日向島 | ●名筆鑑將監住家 |
| ●狭間合戦壬生村 | ●國性爺樓門 | ●昔八丈鈴ヶ森 | ●岸姫松三段目 |
| ●日高川莊司館 | ●盛衰記笹引 | ●同 神崎 | ●彦山毛谷村 |

●合邦辻下の巻
●明烏雪の曙

●菅原傳授佐太村
●同 寺子屋

●同 松王屋敷
(以上廿五段)

◎夏之部

●伊勢音頭油屋
●桂川連理柵帶屋
●朝顔日記濱松
●白石嘶田植
●曾我の對面
●太功記尼ヶ崎
●千両幟猪名川内

●花の上野志度寺
●忠臣藏六段目
●同 笑ひ藥
●同 新吉原
●先代萩竹の間
●玉藻前道春館

●日蓮上人勸作
●三代記三浦別れ
●同 宿屋の段
●狭間合戦竹中砦
●同 御殿
●日吉丸小牧城

●比翼塚花川戸
●鈴鹿合戦平治内
●楠昔嘶德太夫内
●野中の隠井聚樂町
●太功記本能寺
●盛衰記逆櫓
(以上廿五段)

◎秋之部

●伊賀越沼津
●和田合戦市若切腹
●阿國戲場土橋の段
●堀川夜討辨慶上使

●妹背山杉酒屋
●廓寫本又助内
●阿波鳴戸巡禮歌
●戀女房沓掛村

●八陣政清本城
●兜軍記琴責
●布引瀧綿操馬
●蝶花形小阪部館

●掲布染官次郎切腹
●阿國戲場埴生村
●双蝶々引窓
●大内鑑狐子別れ

●三略卷菊畑
●新薄雪鍛冶屋の段

●信仰記上畑屋
●千本櫻すしや

●先代萩對決

●三日松下住居
(以上廿二段)

◎冬之部

●伊賀越新關
●箱根靈驗瀧
●中將姫雪責
●忠藏七段目
●戀飛脚新口村
●近江源氏盛綱陣屋
●新版歌祭文野崎村

●同 岡崎
●女舞衣酒屋
●安達原祭文
●同 九段目
●布引の瀧琵琶
●三十三間堂平太郎内

●佐倉曙宗五郎内
●廿四孝十種香
●苅萱桑門高野山
●伊達娘八百屋
●戀女房馬子歌
●義士忠臣藏本藏下屋敷

●箱根靈驗餞別
●河原達引堀川
●金比羅利生記百度平
●妹背の門松質屋
●昔八丈城木屋
●忠臣講釋喜内住居
●時雨の巨燵紙屋
●姫小松俊寛物語
(以上廿九段、合計百段)

また、出し物に就いては、季節ばかりではない、總てに於いても、一向注意をせぬ。是の頃も或所に『諸連合同淨瑠璃秋期大浚會』と云ふ法性寺入道もよろしくと云ふ、ながい招板が出て居たから、好な道とて、早速に出懸た處、初日の語り物。中入後の六

段が○菅三○帶屋○掲布染○日吉丸○三勝○忠四の懸合●二日目が○濱松○壺阪○新吉原○安達三○沓掛村○忠七の懸合●三日目が○皿屋敷○四ッ谷○太十○埴生村○三代記○楠昔斷、と云ふ番組で、初日は腹切り物が四ッに、心中物が二ッ●二日目が盲人物が四ッに、遊女屋物が二ッ●三日目が幽霊物が三ッに鎧物が三ッ、と云ふ取り合せだ。如何に聯合會で打合せが不充分なればとて、これでは余ンまり出し物がッキて居るではないか。

これはまた毫し變つた斷だが、よく似て居るのと、事實で一才面白いから、序でだから云うて置かう。時は昨年さくねんの春、東京とうきやうの或紳士あるしんしの別邸べつていで、御座敷ござしきの催しもよほがあつた。太夫いふた方は素もとより有名ゆうめいな歴々れきき(但し財産や地位に就いて)にて、金銭きんせんに糸目いとめを付けぬ、と云ふ贅澤ぜいたくさ。この席せきの事に就いては、面白い滑稽談こつげいたんも澤山たくさんあつたが、夫れは問題外もんだいがいだからヌキとして、サテ當日さつじつの語り物ものは○初段ししたんは露拂つゆはらひとして、平素御つねにひいき受うるダレ義太ぎだの奇麗首きれいのくみが二名、荻町おぎちやうと新橋しんばしの太棹藝者たさざうげしやが三名、これが懸合かけあひで七福神しちふくしんをすこしばかり○貳

段目が朝顔あさがおの宿屋○三段目が安達あんたの三○四段目が鰻谷うなぎや○五段目が阿古屋あぐらの惣懸合そうかけあひで、賑にぎやかな事、綺麗きれいな事、大喝采たいかくさい大當り、太夫いふた方は大満足だいまんぞく。僕ぼくも席末せきまつを汚けがす榮えいを得て、御馳走ごちそうのビールに正宗さだむねの微醉機嫌ほろろきげん、結構けつこうな折をりまで貰もらうて、主人しゅじんが態々わざわざ立つて、引留ひきどめらるゝを辞退じたいして、御抱おかへ車で首尾くびしゆいよく歸宅きたくした。

サテ其その時は、何なんの氣きも着つかなんだが、後あとでよく思おもふと。この五段ごだんの出し物しものは、皆調子みなてうし變かつた。これは幽霊物ゆうれいものや盲目物めくらものの三四段さんしやうだんつゝも重かさねるよりも罪つみは輕かろいまた聽人きいてに別段苦痛べつだんくつうもないが、去さりどて注意ちういはすべきものだ。

如何いかに刺身さしみがうまいからとて、これは鰹かつお、これは鯛たい、これは鮪さめど、刺身さしみばかり出しては、御馳走ごちそうにはならぬでないか。以後いあは、幹事かんじなり世話せわ方かたなりが、斯かる事ことには層一層そうしやうの注意ちういを加くはへられん事を、敢て僕ぼくが注告ちうこくする。

マッ早い話はやなしが、芝居しはいの出物だしものでも、一番目ばんめが御家騷動おいえさうどうの時代世話きだいせわで、中幕なかまくが濃厚こうりゆうの太棹たさざう物ものの大時代おほきだい、二番目にばんめは淡白たんぱくとした世話せわの艶物えんもの、大切たいせつが賑にぎやかな所作事しよさくじといふ譯わけで、目先めさき

の變る様に取合せたものだ、本業の能樂(謡曲)などでも、自然に規則の様に番組が制定されてゐて決して相犯さぬ、大抵は一日を五番立として、最初は神々しく神徳を頌し泰平を謠ひたるもの(例へば高砂の如き)次は修羅物として勇しき戰物語(田村など)三番目は葛物として上品優美なる女の舞ふ物(羽衣など)四番目は、現世物といつて仁義忠孝の人情に絡んだものか(曾我など)又は狂女物といつて、物狂ひの筋を仕組みだるもの(隅田川など)最後は祝言として(狸々など)めでたきものか、鬼事天狗事といつて惡魔の降伏(大江山など)か又は賑はしく花やかなるもの(石橋など)にて、終る事になつてゐて、二百番の謠は初番ものとか三番目ものとか云つて、チャンと區別分類されるる。

そこで思ひ付いたは、一層の事、同じ種類の物を五六段つ、選擇して、會を立てたらどうであらう、譬へば。

●花見會 櫻(忠四、妹背山の三) 菊(十種香、鬼一の菊畑) 梅(野崎、毛谷村)等いくらも有る。ソレを一寸見本として並べて見ると。

●雪見會

岡崎(伊賀越)

宗五郎(佐倉曙)

袖萩(安達(三))

●傾城會

吉原(白石嘶)

新町(廓文章)

祇園町(忠七)

●音曲會

琵琶(布引)

鼓(蝶八)

三味線(袖萩)

●片輪會

躰(箱根)

吃(名筆鑑)

てんは(新瀧雪)

●盲人會

澤市(壺阪)

慶政(戀女房)

朝顔(日記)

●幽靈會

れ岩(四ッ谷)

れ菊(皿屋敷)

かさね(阿國戲場)

●化生會

清姫(日高川)

葛の葉(大内鑑)

れ柳(三十三間堂)

●巡禮會

百度平(利生記)

れつる(鳴月)

淺香(朝顔)

●心中會

紙治(巨建)

三勝(女舞衣)

ね俊(堀川)

●鳥類會

雀(御殿)

鶴(安達)

雞(道明寺)

●獸物會

鼠(八陣)

狐(千本櫻)

猿(堀川)

●赤面會

岩永(鬼軍記)

玄蕃(管四)

金藤次(玉三)

●青隈會

時平(菅原)

入鹿(妹背山)

松永(信仰記)

●老人會

久作(野崎)

平作(沼津)

白太夫(管三)

●小供會

鶴喜代千松(御殿)

小三郎小四郎(近江源氏)

笹市松太郎(蝶八)

●角力會

猪名川(轡)

濡髮(双蝶々)

秋津島(二代鑑)

- 泣き會 十八年のため涙(辨慶)
- 船頭會 頼兵衛(矢口)
- 鐵炮會 關兵衛(廿四孝)
- 靈驗會 觀音(靈阪)
- 飲食會 酒屋(三勝)
- 笑ひ會 松王(骨四)
- 切腹會 勘平(忠六)
- 山、名會 高野山(菊萱)
- 川、名會 大井川(朝顔)
- 村、名會 野崎村(歌祭文)
- 泣きつふしたる 目なし鳥(袖萩)
- 渡守(道成寺)
- 泉三郎(腰越狀)
- 諏訪明神(廿四孝)
- すしや(千本)
- 政清(八陣毒酒)
- 櫻丸(骨三)
- 箱根山(龜)
- 筑廣川(又助)
- 毛谷村(彦山)

ア、草臥た。モウよさう、斯んな風に探したらいくらでも有る。ソレを三四ヶ月も前に、連中で闇引をして有る人は復習し、無い人は稽古して、サテ當日、幽靈會ではすみ競べ、笑ひ會では笑ひ競べ、腹切り會では苦しみ競べをしたら、研究にもなり、また目先が變つて面白からう。但し獸物會や鳥類會では、何を競争するのであらう、

コイツは一番考へものだ。

『出し物』に就いて、最一ツ云ひたいのは、時代物と世話物、詞を代へて云へば堅い物に和らかき物の取り合せだ。堅い物と云へば、鎧兜や金襴物で、これを概して時代物と云ふ、世話物とは民間の出来事で、多くは敵討か心中物であるが、六ヶ敷云へば明治以後の物は當世物で、其の以前の物は、堅い和かいに拘らず、皆時代物と云はねばなるまい。だが、時代物と云うても段々に階級の有る物なれば、一口に一括して『アレは時代物』だと、云ふ事は出来ぬ筈だ。これを歴史的に大別すれば(出来事の實際の年月に就いて)

王朝時代(一) 鎌倉及南北朝時代(二) 足利及戰國時代(三) 徳川時代(四) の四ツになる今この百段を此の時代順に並べて見ると。

●王朝時代

(公家物) (大時代)

○建久三年以前、今より七百十五年以前の物

- 鈴鹿合戦 ○大内鑑 ○三十三間堂 ●日高川 ○菅原傳授 ○妹春山 ○安達原
- 中將姫 ○蒔萱桑門 ○玉藻前

鎌倉及南北朝時代

(武家物) (修羅物)
○明徳三年以前、今より五百十四年以前の物

○鬼一三略 ○盛衰記 ○布引瀧 ○兜軍記 ○穰景清 ○一ノ谷 ○御所櫻 ○千本櫻 ○姫小松 ○岸姫松 ○和田合戦 ○曾我物語 ○日蓮上人 ○新薄雪 ○楠昔嘶 ○矢口渡

足利及戰國時代

(武家物) (修羅物)
○慶長八年以前、今より三百年十九以前の物

○蓮如上人 ○信仰記 ○八陣 ○廿四孝 ○三代記 ○狹間合戦 ○蝶花形 ○三日本平記 ○太功記 ○日吉丸 ○彦山權現 ○箱根靈驗

徳川時代

(武士物) (町人物)
○明治元年以前、今より三十九年前の物

●伊賀越 ●伊勢音頭 ●花の上野 ●佐倉の曙 ●掲布染 ●女舞衣 ●河原の達引 ●比翼塚 ○二度目清書 ○加賀見山 ●敵討雅物語 ●桂川連理柵 ○忠臣藏 ●戀緋鹿子 ○忠臣講釋 ●阿國戯場 ●朝顔日記 ●妹脊の門松 ●阿波の鳴戸 ●戀飛脚 ●名筆鑑 ●双蝶々 ●白石嘶 ●染分手綱 ●昔八丈 ●野中の隠井 ●明烏 ○近江源氏 ○義士忠臣藏 ○先代萩 ●歌祭文 ●時雨の巨燵 ●千両幟 ○國性爺

と云ふ事になる。これでは皆時代物で、世話物の區別が知れぬ。これは時代と云ふ字に重を置くから悪い。如何なる世話物でも、時代のないものはない。茲に云ふ世話物とは、民間の出来事即ち、町人百性に關係せし事を指したもので、外題の上の黒丸が世話物で、白丸が時代物だ。

時代物とは單に武家物(歴史に關係せしもの)所謂鎧兜に金襴の物と思へばよい。併同じ金襴でも、忠臣藏や先代萩は、大名の御國騷動で、歴史には無くとも、これを時代物の部に加ふる説も有る、また、これを時代世話と云ふ人も有る。その時代世話の外に、純粹な町人物がある、之れを生世話ものと云ふ。サテこれから先の分類となると非常に六ヶ敷い。なんでそれがそんなに六ヶ敷いかと云へば、古來この區別に一定の標準が無

いからである。(新薄雪、參照)

ソコで時代物、世話物の區別は、マア斯んな事にして置いて、これを標準に一座の出し物を選択するには、時代物(堅き物)の次に世話物(和らき物)、世話物の次には時代物と云

ふ様に、取合せて貰ひたい。世話物の中には堅い場は無いが、時代物の中には、和かき場はいくらも有る。ソウ云ふ場合には、時代物が何段階いても敢て差支へど云ふではない。其所らの處は、よく注意するがよい。この責任は幹事か世話方か、イヤ眞打の（取り語り）全責任である。

如何に大會でも、聯合會の場所でも、同じ出し物を、同じ席にて二段以上出すはよくない事で、こんな事は云ふ迄もない事だが、ソレが商賣人の席で、同じ日に同じ出し物を、二段三段づゝも出して、平氣の平左で居るのが有る、ソレは大阪の播十だ。

大阪の播十と云へば、女淨瑠璃の本来、〇〇〇〇の修練場で、今全国中に出稼ぎしつゝ有る女太夫の中でも、この席で修行せし事の無き者に、碌な者は一人も無い。よし又あつたとした處で、ソレは伏見で官位を受けぬ稻荷か、辨護士試験に及第せぬ代言人と一般、一口に云ふモグリで、本統の物ではないのである、ソコで此の播十と云へば晝夜二回の興行で、晝席と云へで、秋の末と云ふ今日此の頃では、初まりが午

前の十一時で、打ち出しが午後の五時か。この六時間に出勤する太夫が約廿人、これを時間に割ると、一人分が十五分間位。されば一段づゝは素より、半段づゝも満足には語れぬから、止むを得ず半段と云ふ内からも、抜く丈は抜いて、冒頭とサワリと段切と丈語る、其の冒頭も段切も、冒頭にすべき處でも段切となるべき處でも無い處を冒頭としたり段切にしたりするから、文章の上に於いて意味を欠くばかりでなく、字足らず字餘りの妙な言を云つて居る。併、是れを眞面目に冒頭から語つて居ると、十五分間では、當て場にもモラヒ場にも至らぬ内に廻らねばならぬから、ソコで、飛ぶ、抜く、セカス、喰ふと云ふ事になる。この場合には、文學上のなんのと云ふ感念は、太夫にも聽人にも無い、無邪氣に「それやきこえません傳兵衛さん」とか「今頃は半七さん」とかやらかせはそれでよい。と、云つた様な譯だから、同じ物が日に二段三段づゝも出る事が有るが。それが敢て聽人の耳障りにもならぬ。と云ふものだ、僕が去る六月の初めに聞いた時は、三勝と日吉が二段づゝ出たが、元來が前に云うた様な事

情で、此所は修練場と云つた様な意味も含んで居るので、此の播十の席ばかりは、同じ物が同じ日に幾段出たからとて、咎め立ては出来にくい、所謂此所は除外例の場所と云ふものだ。

まだ一ツ『出し物』の事で云ひたいは、祝儀の席での語り物だ、祝儀の席と云へば、饂別、婚禮、開店、賀等の席の語り物で、コイツ一番閉口する、義太夫は素悲哀に出来て居るので、どれでもこれでも、淫蕩ならされば殺伐、殺伐ならされば悲哀、血を見るか涙を見ねばならぬ様になつて居る。ヨシ其の場で血を見ぬにしながら、結果の面白くない心中物なんぞは、祝儀物とはならぬのである。されば「祝儀の席では、なにを出したらよいでせう」どの御尋ねには實に當惑此の事に候だ。

今假に、祝儀の席でも差支への無いと思ふものを、二三段記して見れば○十種香○吃又○阿古屋○曾我の對面○笑ひ藥○くらゐなもの。これ以上は、其の時と場合を考へて、席に差支の無きものを撰むが、太夫の才智と云ふものだ。若し斯る場合に、適當

な語り物無き時は、殊に「御好に任せ」云々の口上を述べさせよ、此の御好み云々の一言は、席に不相應な出し物でも、太夫の落度にならぬ唯一の呪、是れは吾が師匠より直傳の大秘法なれども、内々にて御傳授申す、努めなるとかに思ひ給ふな。

まだ云ひたい事が澤山有る。が、永くなると、例の版元のね眼玉か恐はいから。云ひたい事は「竹豊秘曲録」で云ふ事にして、茲ではこれでよしして置こう。併「さらかね本」の廣告は一寸云ふのが都合であらうと思ふ。

サテ巻首に載せし題字代りの四行物は「さらかね本」の版下及段落の切り方の見本で。實際の大きさはこの一倍。紙は石州半紙の生紙で（見本の通り）表紙付（表紙も、この本の通り）はしくは巻末の廣告文を見られたよ。先は」

鶴澤名門二口演

序

文やら、小言やら、述懐やら
理屈やら、高慢やら

畢